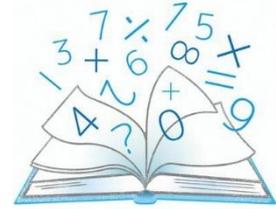


かけはし～国際的な調査から考えよう～第58号

12月10日に31の国と地域が参加したPIAAC（国際成人力調査）の結果が公表されました。この調査は OECD（経済開発機構）が実施しており、読解力・数的思考力・問題解決能力の3分野の調査をしています。日本の結果は読解力と数的思考力がフィンランドに次ぐ2位、問題解決能力はフィンランドと同点の1位でした。この調査は大人の調査なので年代別の結果も示されています。16歳～24歳代と25歳～34歳代ではあまり変わらず、読解力ではむしろ25歳～34歳代の方が高得点でした。しかし、それ以降は年齢を重ねるにつれて結果は確実に下がっていきます。これは日本だけではなく OECD 平均も同じ結果で、原因は加齢だと考えます。一方、数的思考力の分野の日本の平均得点で男性が女性を12点上回るという結果が出ており、多くの参加国でも同様の結果でした。参考までに日本は読解力については0.2点女性が高く、問題解決能力は1.4点男性が高い結果で、数的思考力の男女差が顕著であることが分かります。こちらの原因はどう考えればいいのでしょうか。

PIAAC は大人の調査ですが、子どもはどうなのでしょう。2023年実施のTIMSS（国際数学理科教育動向調査）の結果は調査対象である小4・中2の算数・数学・理科の全てで6～14点男子が高い結果でした。また、4年前と比較すると男女の差は拡大傾向でした。TIM



SSIにはアンケート調査もあり「算数・数学・理科の勉強は」楽しいですか・得意ですか、「算数・数学・理科を使う職業につきたいですか」などの項目すべてで男子の方がポジティブな回答をしています。特に数学を使う職業につきたいですかの質問は男子の 30.4%に対して女子は 14.2%と大きな差があり、男女の点数の差の原因の1つと考えることができます。

理系志望の女子校生らを奨学金などで支援している山田進太郎D&Iの担当者は、学校で女子の理系への低い関心が十分に問題視されておらず、共学校で女子の理系への関心を高める取り組みを提案すると「なぜ女子だけ？」との反応が多いそうです。関心に男女差があるのは各種調査から明らかで女子に特化した取り組みも必要とお話されています。男女の意識の差に対して九州大学の河野銀子教授の調査を紹介します。まず、理数系教科への男女の意欲の差は以前から指摘されていたそうです。そして海外のデータなのですが、教員が男子と多く対話しがちであるとの調査があり、日本もそうした傾向が男女差につながっているとの指摘があるそうです。欧米では授業中に教師と子どものやりとりする時間や回数を図って女子の発言を増やそうとする取組もあるそうです。速攻性はないかもしれませんが、算数・数学や理科の授業で意図的に女子の発言を促す場面を増やすことはできそうだし、学習を苦手とする子どもにアプローチすることは常に大切にしてきました。意欲の観点も同様で苦手意識などにアプローチすることが子どもの自己実現につながるかもしれませんね。

TIMSSの結果を受け、文部科学省は全国学力学習状況調査を男女別に分析する方向で検討を始めているそうです。今後の様々な分析結果に注目し、より具体的な取組を模索していきたいらと考えます。